

家族関係に関する基礎研究^{*}

——父—母—子関係と子どものパーソナリティ——

森 重 敏

幼児期は子どもの人格形成にとってきわめて重要な時期といわれているが、その形成には、家庭のありかた、とくに親子関係がひじょうに重要な意味をもつことはいうまでもない。

この場合、望ましい性格形成を子どものうえにもたらすためには、まず、望ましい親子関係を家庭で築きあげることが必要であり、望ましい親子関係の樹立は、親と子との心理的な関係に含まれるおもな要因を調整することによって達せられる、と考えられる^{**}。

オーストリアのフロイト Freud, Sigmund (1856—1939) が、この問題について、はじめて示唆を与えて以来、親の態度と子どもの性格との関係について多くの臨床的な経験が報告されるようになった。

なかでも、アメリカのサイモンズ^{***}やラドケ^{****}らに代表される関係要因の分析的研究は、親子関係の問題の重要性と科学的研究の必要性とを、われわれにあらためて認識させ、親子関係その他の人間関係に関する新たな研究へ向わせないではおられない。

すなわち、わが国でも、最近、こうした研究の示唆を受けて、日本の親子関

* 本研究は、本学名誉教授山下俊郎先生古稀記念論文集（玉川大学出版部、1973）のなかの拙論にその後の研究資料によって加筆したものである。

** 拙著 1968 子どもと家庭環境 福村出版 64～87

*** Symonds, P. M. 1939 *The Psychology of parent-child relationship*.
Appleton-Century-Crafts.

**** Radke, M. J. 1946 *The relations Parental authority to children's behavior and attitudes*. Univ. Minnesota Press.

係に関する研究が活発に行なわれるようになった。

そこで、われわれの、父—母—子関係研究グループ^{*}では、昭和32年度以来、望ましい人間関係の形成に関する研究を試みることになり、継続して今日に至っている。

この場合、われわれの直接の研究目的は、父—母—子の相互関係を調べ、ここで見出される基本的な関係要因、すなわち、しつけ態度が子どもの性行等どのような影響を及ぼすかをみようとしたものである。

もちろん、こうした性格形成の問題は、これこれの養育態度で子どもに接するとこれこれの性行を示す子どもになるということが明らかになるような簡単なものではない。むしろ、親の接触様式と子どもの性行との因果関係は一義的なものではなく、きわめて複雑であるを見なければならぬだろう。

したがって、われわれは、父—子、母—子の関係を個々バラバラに見るのではなく、家庭内において、父、母はそれぞれに別個の役割をもち、この分化した役割を互いに補い合いながら家族関係を構成していると考え、父と母との養育態度・行動の差異を検討することに重点を置いた。また、従来の親子関係の調査は主として母親に対して行なわれていたが、本研究では、前述のように、家庭における父親の重要な役割に注目し、夜間や休日などに父親を個別訪問し、直接父親からも資料を得ることに努力したわけである。母親のほうは、この訪問時のほか、おもに、小学校や幼稚園に来てもらったときに集団的に調査した。

この調査は、最初、1953（昭和28）年12月に、奄美大島が、それまでおかれ

* 山下俊郎先生を代表者とする親子関係に関する研究の一環として、とくに、幼児、児童を対象とした研究班を指す。全体の研究組織は、昭和32年度より文部省科学試験研究費を受け、今日まで継続研究を行なっている。その研究主題と、当研究班のメンバーは以下の通りである。

昭32, 33年度：「親子関係テストバッテリー作成に関する研究」

昭35, 36年度：「年少者健全育成における効果的人間関係の形成に関する研究」

昭38, 39年度：「児童の発達に即応した望ましい親子関係の基準に関する研究」

研究の当初、三浦 武、森 重敏、三輪 正のメンバーであったが、後に三輪に代わって、八重島建二、島田俊秀が加わった。

ていたアメリカの統治からわが国に復帰した直後、筆者が、鹿児島大学の調査団の一員として、その後は九学会連合の共同調査団^{*}における日本心理学会からの調査員として、そしてまた個人的にも、その前後数回にわたって実施した「奄美島民のパーソナリティ」に関する調査研究で経験的に作成した「親のしつけ態度」に関する質問紙法が基礎となり、後述のような質問紙の型式が次々に作成された。そして、因子分析的な作業段階を経て、最後に、'70（昭和45）年に至って親子関係診断検査（P C R T）を一応完成したわけである。

こうした研究結果については、研究メンバーによって、その都度それぞれ学会などで発表されたものであるが、それが分担の形でここにまとめられることになった。拙論は、その一環として、本研究過程における初期の部分に関する資料^{**}によったものである。

次に、その研究の一端を述べてみたい。

I 父母のしつけの型と子どもの性行

先述のように、子どもに対する親の接触の型については、従来、多くの研究者によっていろいろな分類が試みられているが、われわれは、まず、親の養育態度を「理知的」か「感情的」か、および「形式的禁止的」か「独立助長的」かという軸でまとめ、こうしたしつけの型と子どもの性行との関係を見てみた。

1. 調査方法

調査の方法として、まず、相反する2つのしつけの方針のうち、どちらに賛

* 日本心理学会・同言語学会・同社会学会・同宗教学会・同考古学会・同民俗学会・同民族学協会・同人類学会・同地理学会の九つの学会の連合体。昭和30、31年の兩年度にわたって、文部省総合研究費による「奄美大島の実態調査総合研究」が行なわれた。

** ここでいう本研究における初期とは、この研究の当初、昭和31年度から昭和36年度に至る数年間を意味する。この研究過程における研究としては、本拙論のほか、われわれがすでに着手していた因子分析的研究や、そこで見出された親子関係の4因子と子どものパーソナリティ、IQ、AQなどとの関係に関する研究、その他、調査・検査の妥当性に関する研究などもあげられるが、これらの詳細については他の機会に譲りたい。

成であるか、あるいはどちらを実行しているかを選ばせる形式の間10項目からなる「態度調査票」をつくった。そのうち、5問は理知的態度か感情的態度、残りの5問は、既成の作法や道徳を重視し、これに反することを禁止する「形式的禁止的態度」、あるいは、子どもの社会的人格の成長を助けて自主的に行動させることに重点をおいた独立助長的態度であるかを調べるものである。たとえば、次のようである。

- (イ) 叱るときもほめるときも、いつもその効果を考えながら叱ったりほめたりします。
- (ロ) 子どもを叱るときは心から怒って叱り、ほめるときは心から喜んでほめます。

上のしつけ方針（第1項目）で、(イ)の型を理知的態度とみ、(ロ)の型を感情的態度とみるわけであるが、そのいずれか1つを選択させることになる。

また、たとえば、次のようなしつけ方針（第5項目）では、(イ)は独立助長的態度とみ、(ロ)を形式的禁止的態度とみるわけで、同様に1つを選択させる。すなわち、

- (イ) 「しましゅうね」ということのほうが「してはいけません」ということより多いようです。
- (ロ) 「してはいけません」ということのほうが「しましゅうね」ということより多いようです。

こうして、対になった10項目にわたって、幼稚園および小学校の父母にそれぞれ、選択的な回答を求めたわけである。

また、日常の親子の接触のしかたについて調べるために、接触調査を親に対して行なった。そのために、まず、調査用紙をA、B2種類作成した。（調査用紙第1号）

この調査Aは、親に対する調査で、たとえば、「あなたは、お子さんとよくあそんであげますか」とか、「あなたは、お子さんによく話をしてあげますか」といった質問14項目からなり、各項目について、「ひじょうによくやる」、「普

通」,「あまりしない」の3件法による評定法で,父母に別々に記入してもらった。これは,とくに父と母と別個に調べることが,この研究のひとつのねらいだったからである。

他方,調査Bは子どもに対して行なうもので,調査Aに対応した質問項目,たとえば,「あなたは,おとうさんともっとあそんでもらいたいですか」などの14項目について,子どもに,「はい」か「いいえ」かを聞いたものである。

そこで,調査Aによる親の回答(親の接触度)と調査Bによる子どもの回答(子どもの欲求度)とを組み合わせることで検討してみることにし,子どもの要求度と親の充足感とのずれを見出そうとした。

それについて見ると,親があまり子どものために行っていないが,子ども,親に対して要求していない場合(c)と,親がひじょうに子どものために行っているのに,子どもは親にもっとしてもらいたいと要求している場合(d)とがある。

この場合,このcの項目数(c点)が多いことは,親子の間が疎遠な関係のときと,子どもがしっかりしているときとが考えられ,他方,d点が多いことは,これは,親子の間が親密な場合と,子どもが依存的な場合とが考えられた。

このようにして,d点・c点,つまり,親・疎関係を中心とした親子接触度の検討が行なわれた。(以上,付録一調査用紙第1号参照)

このほか,子どもに対しては,個別面接により,親に対する欲求や評価を聞き,また,一部の園児(練馬区・清心幼稚園)に対して,ロールシャッハ・テストが実施された。

さらに,担任の教師に依頼して,淡路式性行評定尺度で,子どもの性行をそれぞれ評価してもらった。

この性行評定尺度は,たとえば,「気むずかしい」と「気軽である」を両極とする項目について,-1から+2までの5段階法で評定するというように,20の性行項目から成っていた淡路氏案のものを,筆者が教育的,実用的な観点

から、別紙のように、5段階の数字をイ、ロ、ハ、ニ、ホに改めるとともに、○印をつけた該当項目のなかでとくに特徴的（長所と短所）と思われるものには、さらに○印、つまり◎印をつけ、プロフィールに描くなどして、診断・指導の手がかりを得ることができるよう工夫したものである。

なお、これは本来、幼児用の尺度ではあるが、小学校児童にも適用できるように、児童の場合には、淡路氏案第11項目「人の厄介になりたがる」を「依頼心が強い」に、第18項目「人をいじめる」を「人とよくけんかする」に修正して実施した。（付録一幼児性行評定尺度参照）

この尺度では、左側に挙げられている項目が望ましくない性行を、それに対置されている右側の項目が望ましい性行を、それぞれ示すものであるが、この20項目について、1点から5点までの5段階で評定すれば、100点満点で数量化することができる。こうして得られた得点を、性行点と呼ぶことにした。そして、この性行点が高いほど、その性行は好ましいとされたわけである*。

調査対象は、池袋第三小学校（東京都豊島区）2年男女児各25名、清心幼稚園（同練馬区）園児30名、柏木幼稚園（同新宿区）園児10名、総計90名（いずれも両親のそろったもの）と、その全員の父と母とである。

このようにして、昭和32年11月から33年1月にかけて本調査を実施した。

* ここで、好ましい性行および好ましくない性行を具体的な行動特徴で示すと、つぎのようである。

- (1) 好ましい性行——気軽である・平静である・物事を知りたがる・よく注意する・根気がよい・落ちつきがある・元気である・くふうをこらす・卒直である・自分の考えで行動する・自分のことは自分でする・すなおである・協力する・秩序を守る・悪ふざけをしない・そねまない・がまんする・むつみ合う・ひとの面倒を見る・ものをたいせつにする。
- (2) 好ましくない性行——気むずかしい・興奮しやすい・何ごとにも興味が薄い・気が散りやすい・あきっぽい・性急である・元気がない・独創性がない・意志を發表しない・いいなりしだいになる・人のやっかいになりたがる（依頼心が強い）・強情をはる・ひとりぼっちを好む・わがままなふるまいをする・ふざけたがる・ねたみ深い・よくすねる・人をいじめる（人とよくけんかする）・冷淡である・ものを粗末にする。

2. 結果と考察

この結果、子どもの性行が好ましいのは次の場合である。

- (1) 父親の独立助長的態度が強い場合。(幼稚園児の場合)
- (2) 父親の独立助長的態度が極端に強い、極端に弱い場合。(児童)
- (3) 母親の独立助長的態度が強い場合。(児童)
- (4) 父親の独立助長的態度と母親の独立助長的態度との強さの差がない場合。(園児)
- (5) 父親よりも母親のほうが、独立助長的態度が強い場合。(児童)
- (6) 理知的—感情的態度の軸については、幼、小とも、顕著な傾向は認められない。

このように、独立助長的—形式的禁止的態度の軸に関しては、幼稚園、小学校とも、子どもの性行に対する影響のタイプがいくつか見られる。

すなわち、子どもに対する独立助長的しつけ態度は、幼稚園期には、父親のほうがより強く示し、小学校へ入った場合には、母親のほうがより強く示すことが、子どもの好ましい性行を育て得るということになる。

また、独立助長的態度における父親と母親の相対的強さの差が無いほうが園児の場合は望ましく、児童の場合は、その差が極端なほどよいということになる。

さらに、幼児期と小学校時代とで、子どもに対する父母の、独立助長的態度のしつけ効果が違う点については、今後の研究にまたねばならないが、ひとつは、しつけは年齢発達に応じて行なう必要があるということ、今ひとつは、幼稚園時代は小学校時代と異なり、幼児がもっぱら親の養護、とくに母性的な保護を必要とすることに関係があるのではないかと考えられる。

いずれにしても、こうした傾向から、子どものしつけが、幼児期にきわめて必要なことであり、しかも、親のしつけ態度の現われかたのひとつひとつがみな、子どもの人格形成にとって重要な意義をもつことがわかる。

そこで、父母の養育態度と子どものパーソナリティとの関係が、問題となってくる。

Ⅱ 父母の養育態度と子どものパーソナリティ

先の調査で認められた父母のしつけの型に対応して、子どものパーソナリティはどのような傾向を示すものであろうか。先述のように、養育態度と子どもの性格形成の問題はきわめて複雑で、両者の間で、一義的な関係を見出すことは困難であるが、一定の性格検査の結果と先述のしつけ態度との相関関係を調べることは、この問題の究明に役立つことである。

そこで、性行評定尺度では得られない内面的な人格をさぐるためロールシャッハ・テストを幼児に試み、その反応をしつけの型との関連において分析してみた。

1. 調査・検査法

まず、親の養育態度の調査法は、前記Ⅰの場合とまったく同じである。ロールシャッハは原版が用いられ、施行法は、おおむねクロッパー^{*}に準拠している。

このテストは、われわれの共同研究の一員であった故滝沢清子氏^{**}と青木孝悦氏^{***}とが担当されたものであるが、テスト実施に当たっては、施行者による差違が生じないように努力が払われた。

また、親の養育態度との関係をみる便宜上、表記のようなロールシャッハの暫定的な評価法が工夫された。(表1参照) これによって幼児のパーソナリティ評価点(R評価点)が算出された。この場合、このR評価点が高いとか、よいとかいうのは、ロールシャッハ・テストの結果が、つまりこのテストにあらわれたパーソナリティが望ましいということの意味するのである。

2. 結果と考察

* Kropfer, B.

** 東京都立大学人文学部心理研究室助手(当時)。この研究の過程で惜くも急逝された。ここに、ごめい福をお祈りいたします。

*** 同大同学部大学院学生(当時)。

そこで、統計的に有意な結果の概要は次のようである。

- (1) 父の理知的態度は、弱い方が幼児のR評価点がよい。つまり、パーソナリティは好ましい。(図1・A)
- (2) 父の独立助長的態度は、強い方が幼児のパーソナリティがよい。(図1・B)
- (3) 父母の理知的態度に見られるずれは、少ないほうが、幼児のパーソナリティがよい。(図1・C)
- (4) 父母の独立助長の強さのずれも、また少ないほうが、幼児のパーソナリティがよい。(図1・D)
- (5) 父—母—子の親密度が高いほうが、幼児のパーソナリティがよい。(図1・E)

なお、母の理知的態度および独立助長的態度とR評価点との関係は、父の場合とは逆の傾向がみえるが、統計的には有意でなかった。

これらの結果は、しつけ態度と子どもの性行との関係を検討したさきの調査結果を裏づけているといえよう。

また、親のしつけ態度と親子の接触度との関係を見てみると、父の理知的態度が弱い場合は、父子の親密度(d点)が低いという傾向があり、独立助長的態度が強い場合は父—子の親密度が高いという傾向がみられた。

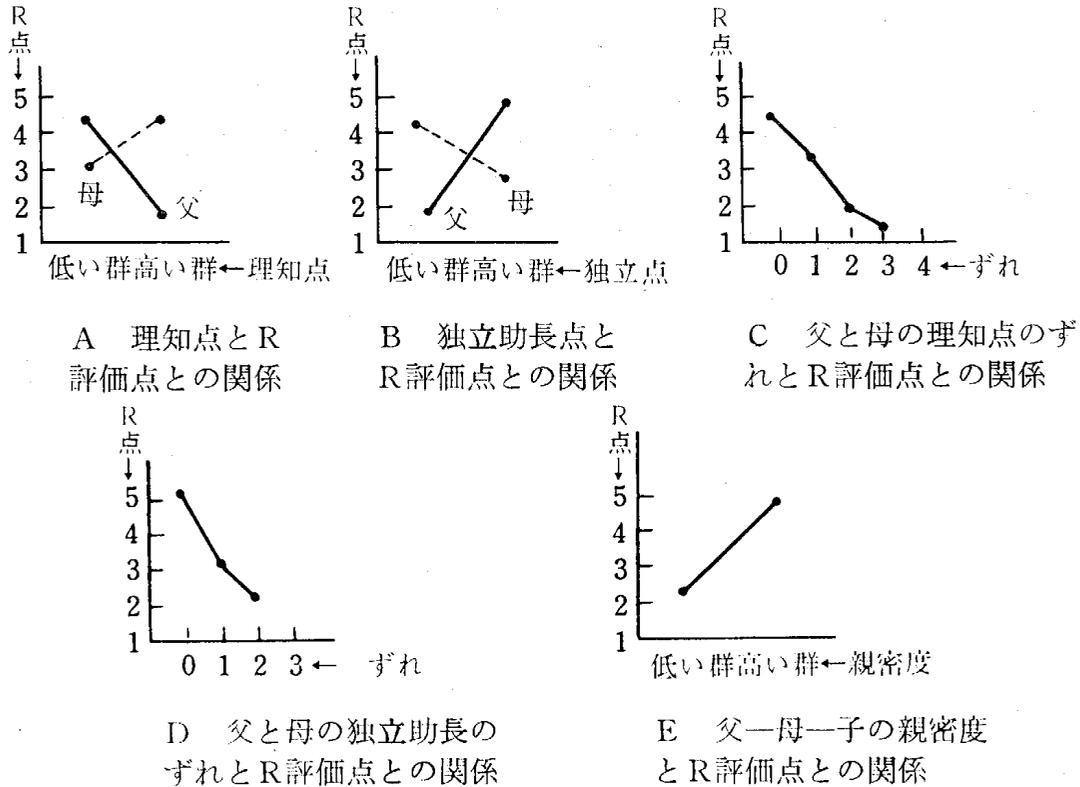
このような傾向から、父親との親密度の高い子どものほうが、低いものにくらべて、性格評価点(R評価点)の高いものが多いわけであるから、父の理知的態度が弱く、独立助長的態度が強い場合に、子どもの性格評価点が高いとい

表1 ロールシャッハ反応の暫定的評価法

Rorschach	評定法
M+があれば	2点
FMがあれば	1点
M+とともに明暗反応があれば	1点
MがないときはFL > LF + Lのとき	1点
$\frac{F+}{R}$ %が30以上なら	1点
FC > CF + Cなら	1点
A%が45以下なら	1点
Inquiryにはっきり答えられる	1点
Perseveration	-1点
Rejection	-1点

注：滝沢清子・青木孝悦：「父—母—子関係とRorschach反応」による。

図1 父母の養育態度とロールシャッハ反応 (滝沢清子・青木孝悦)



う結果になったものと思われる。

すなわち、幼児期のしつけ態度は、理知的な方法より、子どもの自主性を促そうとする独立助長的なやり方のほうが、子どもの望ましい性格の形成上、重要であるということになる。

また、父親と母親のしつけ態度に一貫性が必要であり、父—母—子の間の親密な人間関係が必要であるといえる。

したがって、幼児のパーソナリティ形成に重要な影響を与えるのは、親の養育態度が、たんに理知的であるとか独立助長的であるという表面的なものではなく、その底に流れている父—子関係の親密さ、あるいは交流の深さという人間関係こそ、重視されなければならないといえよう。

Ⅲ 父—母—子の接触の分析

親や教師が子どもの発達や行動について、十分認識することが大切なのはい

うまでもないが、一般に、子どもの表面的行動を通して、その子の心理を察知することができても、行動にあらわれない子どもの思考、願望などを捕えるのは容易なことではない。

そこで、われわれは、子どものしつけや教育における、父—母—子間の相互理解を重視し、子どもに対する父・母の把握の問題、父・母に対する子どもの理解、子どもの把握に関する父—母間の一致度などを検討することにより、生育環境としての親子関係を新たに分析してみた。

このように、親のしつけ態度や接触度に関する研究をさらに発展させ、親子相互の把握とその類型、父—母—子間の理解の一致・不一致などの問題を分析的に検討するのが、本研究の主なねらいである。

1. 調査方法

調査手続きとして、今回は構想を改め、調査項目を、「親和」・「保護」・「意志尊重」・「圧力」の4種に分け、それぞれ7問(園児)ないし8問(児童)、計28項目(幼稚園)、ないし32項目(小学校)を設け、調査用紙第2号を作成した。

(付録一調査用紙第2号参照)

なお、上記4種の項目は、親の接触のしかたを示す関係因子である。すなわち、「親和」は、子どもの相手になってよく遊んであげるような態度、「意志尊重」は子どものいいわけなどをよく聞いてあげようとする態度、「圧力」は子どもの気持を無視して、すぐ叱りつけるような態度を、それぞれ意味する。

本調査は、対象と内容別に、A、B、Cの3種に区別された。調査A、Bは父・母を対象とするものであるが、調査Cは子どもを対象とする。

すなわち、調査Cの場合は、たとえば、子どもに対し、「あなたのおとうさんは、あなたといっしょに、よくあそんでくれますか」と、父のことについて聞き、また、「あなたのおかあさんは、あなたといっしょによく遊んでくれますか」と母親について聞くわけである。答えかたは、3件法(「はい」、「いいえ」、「どちらでもない」)によった。

次に、調査Aは、調査Cと対応して、たとえば、親に対して、「あなたはお子さんの相手になって、よく遊んであげますか」などと聞く。答え方は同じく3件法である。

さらに、調査Bを親に試みるわけであるが、これは、調査Cと同一の質問項目を父・母別に示し、わが子がどのように答えたと思うかを、項目ごとに聞いた。

たとえば、調査Cの各項目を父親に示して、「あなたのお子さんに、『おとうさんは、あなたといっしょに遊んでくれますか』と尋ねましたが、お子さんはどう答えたと思われますか。お子さんが『はい』と答えたと思われるなら、『はい』に印をつけて下さい……」という方法で聞く。母親に対しても同様に聞き、答えは3件法（「よく遊んであげる」、「あまり遊んであげない」「どちらともいえない」）によった。

調査対象は、都内の1幼稚園（前記の家政大付属みどりヶ丘幼稚園）と1小学校（前記の池袋第三小の3年児）の幼児および児童それぞれ50名とその父母である。調査時期は、昭和33年11月であった。

調査資料の整理は、親子の接触のしかたを数量的に処理するために、父母と子どもの回答をすべて3段階で評定し、はい（よくしてあげるほう）を3点、わからない（どちらともいえない）を2点、いいえ（あまりしてあげないほう）を1点として、その得点（接触点）を出してみた。

そこで、たとえば、親和点が高いことは、子どもに対してきわめて親和的態度であることを意味し、圧力点が高いことは、親が子に圧力をかけることが少ないことを示す。

このほか、幼児性行評定尺度を、全部の幼児・児童について、担任の教師が評定する方法で実施し、1点～5点の5段階評価でその総点（性行点）を出し、これと親の接触点との関係を検討した。

2. 結果と考察

(i) 父—母—子間の意識のずれ

まず調査Aの結果によると、一般に、父母とも、接触点（平均：父2.46，母2.41）は中間（2点）より高い得点を示しているが、父のほうが、子どもの意志を尊重し、子どもに対して圧力もかけていない、と思っているようである。

しかし、調査Bの結果では、父のほうが、圧力的な態度について、子どもからそれほど高く評価されていないと感じており、逆に、母のほうが、子どもからよく評価されていると思いついでいることがわかる。

こうした親の推測的考えには、日常、いかに子どもに接しているか、また、子どもをどのように理解しているかが反映されているといえよう。

そこで、親の子どもに対する理解度を知るために、調査Aから得られた親の意識的な父—母—子関係の接触点と、調査Bから得られた子どもの評価を親が推測した接触点との差を、便宜上数値で出してみた。（表2）

これは子どもへの親の理解度を示すもので、この場合、数値そのものよりも、その相対的な理解度の違いと、正負の方向が注目されるのである。

すなわち、上表によれば、父親は、「親和・保護」については子どもから高く評価されていると思いついで、「意志尊重・圧力」では、子どもから低く評価されていると思いついでいるようである。

母親は、これとは逆に、「親和・保護」については子どもから低く評価されていると思いついで、「圧力」に関しては高く評価されている、と自信をもっているようである。

表2 子の評価を親が推測した接触度の重み

態度の型	父	母
親和	+ 8	-16
保護	+11	-14
意志尊重	-30	0
圧力	-33	+19
計	-11	- 1

注：上表の数値は、親の自己評価による父—母—子の接触点と、子の評価を親が推測した接触点との差を便宜上100倍したもの。正負の方向と相対的な重みに意味がある。

次に、親の養育態度について親自身がもっている接触意識と、子どもが受けとめている接触意識とを比べてみた。両者間のずれを示すのが表3・4である。

表3 父—子, 母—子の意識のずれの分布 (幼稚園児)

ずれの分量の 総和	親 和		保 護		意志尊重		圧 力		計	
	父	母	父	母	父	母	父	母	父	母
7 ~ 11	15	25	34	47	0	10	34	68	83	150
3 ~ 6	47	62	47	68	55	77	63	10	214	217
-2 ~ 2	21	25	27	25	37	39	26	25	111	114
-6 ~ -3	68	46	53	51	22	9	28	68	171	174
-12 ~ -7	38	0	7	0	0	0	41	50	86	50
計	189	158	168	191	116	135	192	221	665	705

注：ずれの分量の総和欄の数は接点のずれの範囲を示し、分布の数はすべて件数を示す。

表4 父—子, 母—子の意識のずれの分布 (小学校3年)

ずれの分量の 総和	親 和		保 護		意志尊重		圧 力		計	
	父	母	父	母	父	母	父	母	父	母
7 ~ 11	28	25	32	15	17	29	15	27	92	96
3 ~ 6	32	54	31	47	43	48	21	26	127	175
-2 ~ 2	30	30	29	31	33	25	24	25	116	111
-6 ~ -3	57	28	49	50	38	39	51	76	195	193
-12 ~ -7	39	19	24	17	7	0	37	47	107	83
計	186	156	165	160	138	141	148	201	637	658

この場合も、数字そのものはそれほど統計的意味はないが、父—子間、母—子間の意識のずれの方向と相対的大きさが注目される。つまり、

- (1) 概して、幼・小とも、母—子間の方が、父—子間より、意識のずれがやや大きい。
- (2) 幼・小とも、「親和」では父—子のずれが大きい、「圧力・意志尊重」では、母—子のずれが大きいようである。

- (3) 「保護」に関しては、園児の場合、母の方が、児童の場合、父の方が、子どもとのずれがやや大きい。
- (4) 一般に、幼・小とも、親子のずれは、母—子間で正の方向に、父—子間で負の方向に、それぞれ大きく開いている。

このように、親の養育態度における接触意識と子どものもつそれとの間に、父・子、母・子ともかなりのずれがあるばかりでなく、そのずれ方が、父と母により、また接触の型により異なってくるのがわかる。つまり、父—母—子間の理解度は、相互異同があり、多様である。

(ii) 父—母—子の接触度の比較

以上は、おもに、父—母—子間の接触の様相を4型式の面から、親子のずれを中心に検討したが、次に、親子間の全接触度を、親の自己評価（調査Aより）、子の評価への親の推定（調査Bより）、親への子の評価（調査Cより）などの面から見てみよう。

この分析の対象は、前述の幼稚園児のうち、さきの接触調査と後述のロールシャッハ検査との両資料が揃った6歳児23名（男10名、女13名）である。

調査A、B、Cのそれぞれから得られた接触点の総点を、父、母について3種ずつ、合計6つの接触総点（平均値）で示したのが右図である。（図2）

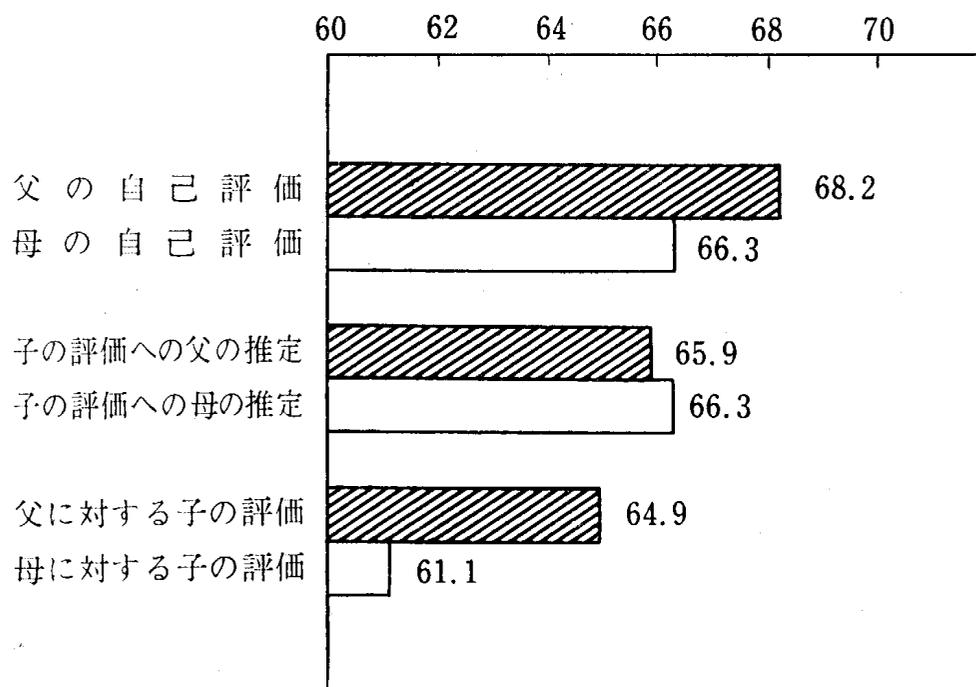
この図によると、親に対する子どもの評価は以外に厳しく、とくに母親とのずれが大きいことは注目すべき点である。

また、父の自己評価に比して母の自己評価が低い、子どもの親に対する評価を推測した場合は、父の推定がやや低い。

これらの傾向は、母親が子どもと接触する機会が多いことから、わが子については十分心得ていると思込み易いことと共に、子どもは養育している自分（母親）に対して、当然高く評価しているはずだという期待感もしくは要求傾向があることからくるものと思われる。

一方父親のほうは、この点、子どもとの日常的接触が少ないため、子どもに

図 2 父—母—子の接触点の比較



注：上図は滝沢清子氏の論文「Rorschach評価点と父—母—子接触総点について」の資料に基づいて、筆者が調整したものである。

対する要求水準も母親より低くなるのであろう。

これらのことから、子どもに対する理解の程度や方向が、父、母により差異を生じるのである。

Ⅳ 父—母—子の接触度と子どものパーソナリティ

上述のように、多様な接触状況を示す父—母—子関係は、子どものパーソナリティとどのような関係があるのであろうか。この点について調べるため、ロールシャッハ評価点（R点）による幼児のパーソナリティと、父—子、母—子の接触点との関係を調べた。

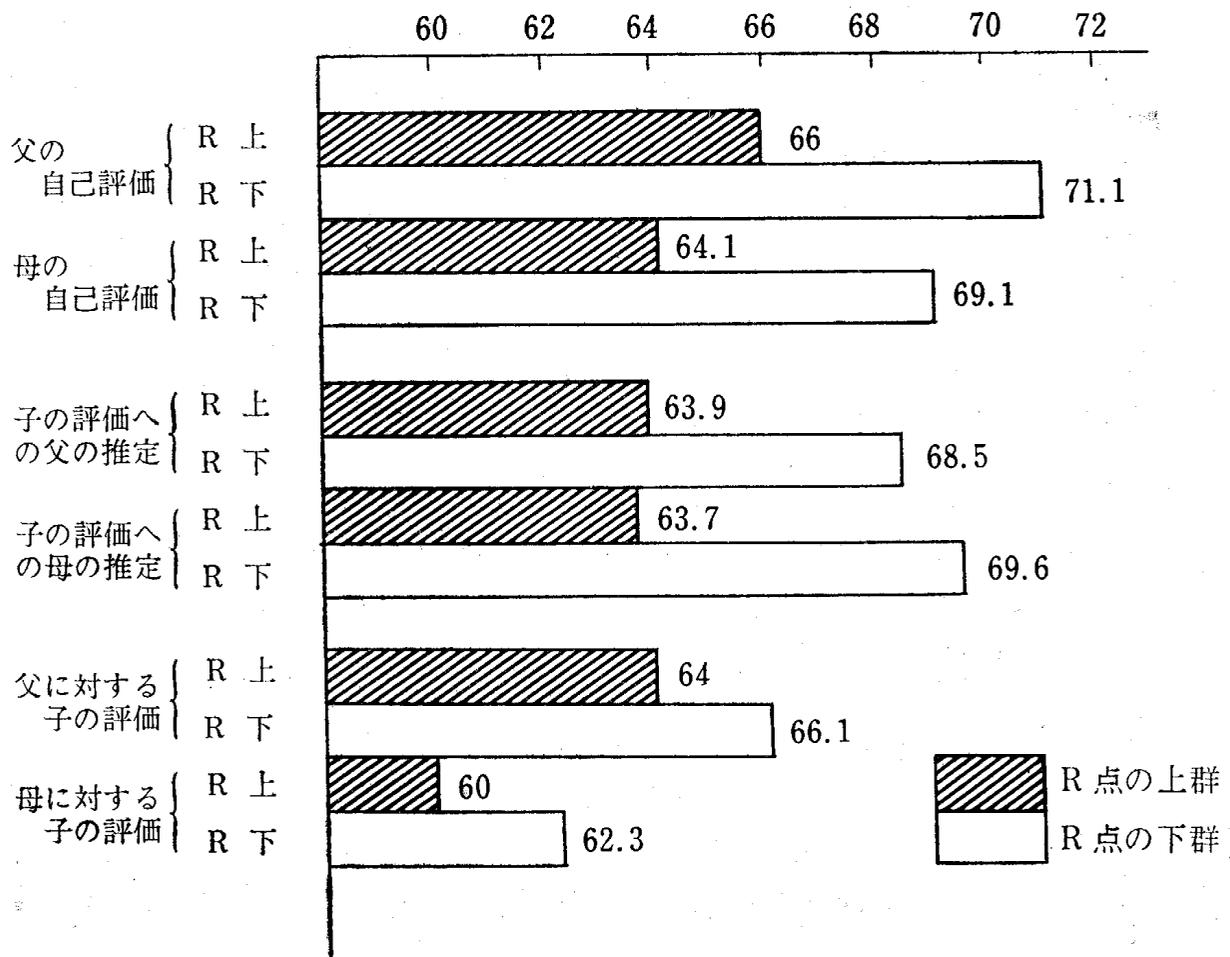
1. 調査・検査法

接触総点およびロールシャッハR点の算出法は、前述の通りである。ロールシャッハテストは、前回同様、滝沢氏により施行され、対象、調査・検査時期、その他の手続も、前述と同様である。

2. 結果と考察

ロールシャッハ・テスト結果のR点を良い群（上）と悪い群（下）とに分けて、接触総点を比較した。それを示すのが下図（図3）である。

図3 幼児の評価点の良い群と悪い群における接触総点（平均値）の比較



注：上図は滝沢清子氏の前掲論文資料に基づいて、筆者が調整したもの

これによると、R点の良い群のほうが、父、母の自己評価も、子どもの評価に対する父母の推定も、父母への子どもの評価も、接触総点の平均値がつねに低いことがわかる。

つまり、R評価点の良い（パーソナリティの望ましい）子どもとその父母は、父—母—子の接触に対する評価に関してひかえ目であることがわかる。

次に、R点の上群・上群ごとに、父—子、母—子の接触点のずれを見てみる

と、R点の良い幼児のほうに、子どもによる評価が父・母による評価にまさるものが多く現われていることがわかった。また、父・母の自己評価についても、子どもの評価への父・母の推定についても、同様な傾向がみられた。

すなわち、パーソナリティの好ましい幼児の多くは、父・母の自己評価より、また、父・母の推定よりも高い評価を、父・母にしている。

また、父一子、母一子のずれの絶対平均値をR点の上群・下群ごとに見たのが表5であるが、この場合、R点の良い群は、親と子の回答のずれが少ないとは限らないことを示している。

すなわち、パーソナリティの良い幼児の父母たちは、子どもとの接触に関する報告がひかえ目であり、親子間のずれの大小は、子どもの人格と必ずしも一義的關係を持つのではないことがわかる。

V 父一母一子の接触度と子どもの性行（その1）

最後に、前述4種の接触態度と子どもの性行との関係を検討してみよう。

接触型式については、親和と保護、意志尊重と圧力がそれぞれ関連していることがわかったため、こんどは、「親和・保護」と「意志無視・圧力」の2要因とし、これと子どもの性行との関係を調べてみた。

1. 処理方法

調査A、B、Cそれぞれ32項目の質問よりなる親のしつけ態度を、「親和・保護」に関するもの17項目、意志無視・圧力に関するもの15項目に整理した。そして、この2要因と幼児性行評定尺度との関係を検討したわけである。

対象は、前述と同一幼児、児童各50名であるが、園児には上記接触の2要因

表5 R評価点の良い群と悪い群における父一子、母一子のずれ

R 点	親の自己評価		子の評価への親の推定	
	父一子	母一子	父一子	母一子
上 群	10.0	8.8	10.5	7
下 群	7.9	8.7	7.5	8

注：上表の数値は、接触総点のずれの絶対平均値を示す。（滝沢清子氏資料による）

と性行との間に統計上有意な傾向が見られなかった。したがって、ここでは、児童の場合について考察する。

2. 結果と考察

まず、統計的に有意味な結果の要点をあげると、次のようである。すなわち、子どもの性行が好ましいのは、次のような場合である。

- (1) 父の保護・親和意識^{*}が強いほど好ましい。(危険率1%) (表6)
- (2) 父の意志尊重・非圧力の意識が強いほどよい。(同5%) (表7)
- (3) 父の保護・親和および意志尊重・非圧力の意識が強いほどよい。(同2%) (表8)
- (4) 母の保護・親和意識が弱くても、意志尊重・非圧力の意識が弱くない場合は、よい。(同1%)(表9)
- (5) 子の母に対する評価を推定した母の意志尊重・非圧力意識が強い場合、弱い場合は、よい。(同5%)(表10)
- (6) 子の母への評価を推定した母の

表6 父の保護・親和と子の性行

性行点 保・親点	(上)	(中)	(下)	計
	81以上	80~66	65以下	
(大)41以上	9	1	7	17
(中)36~40	5	2	14	21
(小)35以下	4	6	2	12
計	18	9	23	50

$$\chi^2 = 15.58$$

$$p < .01$$

$$c = .155$$

表7 父の非圧力・意志尊重と子の性行

性行点 圧・意点	(上)	(中)	(下)	計
	81以上	80~66	65以下	
(大)39以上	11	4	4	19
(中)33~38	3	3	13	19
(小)32以下	4	2	6	12
計	18	9	23	50

$$\chi^2 = 9.5388$$

$$p < .05$$

$$c = .401$$

表8 父の保・親が大(41以上)の場合の父の圧・意と子の性行

性行点 圧・意点	(上)	(中)	(下)	計
	81以上	80~66	65以下	
(大)39以上	8	0	2	10
(中)33~38	1	1	6	8
(小)32以下	0	0	3	3
計	9	1	11	21

$$\chi^2 = 11.9251$$

$$p < .02$$

$$c = .602$$

* 父が、子どもに対して「保護・親和的態度で接触している」と自己評価している程度を意味する。

保護・親和意識が弱くても、意志尊重・非圧力における子の評価が大であろうと母が意識している場合、もしくは、そうした子の評価が小であろうと母が意識している場合は、よい。(同1%) (表11)

(7) 母の接触意識と子の母への評価との間のずれが大きい場合は、子どもの性行は好ましくない。(同2.5%) (表12)

(8) しかし、父子相互の意識のずれと子どもの性行との間には、一義的な関係が見られない。

(9) 父と母の保護・親和意識におけるずれが開くほど、子どもの性行は好ましくない。(同1%) (表13)

(以上、(7)と(9)を除けば、子どもの性行にとって望ましい場合である。)

こうした結果から、父の保護・親和か意志尊重・非圧力のうち、どちらか一方の要因が測定されると、子の性行の測定は可能であると考えられる。

((1), (2), (3)より)

しかし、母子関係では、母親や子どものパーソナリティの問題が関連し、この親子関係の規定性として、人格要

表9 母の保・親が小(36以下)の場合の母の庄・意と子の性行

性行点 庄・意点	(上)	(中)	(下)	計
	81以上	80~66	65以下	
(大)38以上	2	0	0	2
(中)32~37	0	1	4	5
(小)31以下	2	0	2	4
計	4	1	6	11

$$\chi^2 = 17.4616$$

$$p < .01$$

$$c = .771$$

表10 子の評価を推定した母の庄・意(大・小×中)と子の性行

性行点 庄・意点	(上)	(中)	(下)	計
	81以上	80~66	65以下	
(大)38以上 (小)32以下	14	3	9	26
(中)33~37	4	6	14	24
計	18	9	23	50

$$\chi^2 = 7.5747$$

$$p < .05$$

$$c = .363$$

表11 子の評価を推定した母の保・親が小(38以下)の場合の母の庄・意(大・小×中)と子の性行

性行点 庄・意点	(上)	(中)	(下)	計
	81以上	80~66	65以下	
(大)38以上 (小)32以下	8	1	3	12
(中)33~37	0	2	4	6
計	8	3	7	18

$$\chi^2 = 9.285$$

$$p < .01$$

$$c = .582$$

因など別の要因も働いていることが推定される。(6)より)

すなわち、父—子関係に比して母—子関係の規定要因にはより複雑なものがあるように思われる。そこで、さらに父—母—子関係を規定する基本要因の究明のため、これまでの調査結果を再検討して、因子分析的な発展研究が、その後の中心課題となったのである。

VI 父—母—子の接触度と子どもの性行 (その2)

接触型式については、前記「接触度と子どもの性行 (その1)」の場合と同様の2要因(親和・保護と意志無視・圧力)であるが、性行については、つぎのように性行評定尺度の項目を分類して、それらの性行型と前記の2要因との関係を検討した。

1. 処理方法

すなわち、性行項目を、注意散漫—注意型、意志薄弱—意志型、ひねくれ—素直型などに分類し、これらの型と養育態度を示す接触点(保護点および圧力点)との関係を見た。

対象は、前述の場合とまったく同じであるが、ここでは、多少有意の関係が見出された園児(50名)の場合について考察しよう。

そこで、性行型のうち、接触点といちじるしい関係が見られた上記3種類の型と接触点との相関の傾向について見てみると、つぎのようである。

表12 接触意識における母—子のずれと子の性行

意識差	性行点			計
	(上) 81以上	(中) 80~66	(下) 65以下	
(大)6以上	3	0	11	14
(中)5~-5	9	5	5	19
(小)-6以下	6	4	7	17
計	18	9	23	50

$\chi^2 = 11.5202$
 $p < .025$

表13 保護・親和意識における父—母のずれと子の性行

意識差	性行点			計
	(上) 81以上	(中) 80~66	(下) 65以下	
(大)4以上	6	1	9	16
(中)3~-4	8	0	6	14
(小)-5以下	4	8	8	20
計	18	9	23	50

$\chi^2 = 14.7282$
 $p < .01$
 $c = .460$

2. 結果と考察

幼・小とも、親の親和・保護の接触度を「保護点」、意志無視・圧力の接触度を「圧力点」として示すと、子どもの性行型との間には、つぎのような関係が、傾向としてあげられる。

- (1) 親の保護点と子の意志薄弱—意志型との関係についてみると、父の場合には両者間に顕著な関係はないようであるが、母の場合、保護点が中位もしくは下位のときに子の意志型性行点をもっともよい。(図4, 5) すなわち、母の保護意識が消極的でも、子どもの性行面では問題ないといえる。
- (2) 保護点とひねくれ—素直型との関係については、父・母とも、保護意識が中位のときに、子の素直型性行がもっともいちじるしい。また、母の保護意識が消極的でも、この面における子どもの性行は問題ない。(図6, 7)
- (3) 圧力点と意志薄弱—意志型とについては、父の圧力意識が中位のときに意志薄弱型の子どもがもっとも多い。母親の場合には、両者間に顕著な関係が見られない。(図8, 9)
- (4) また、圧力点とひねくれ—素直型とについては、父の非圧力の意識が大、つまり圧力意識が消極的であるとき、素直型の子どもがもっとも多い。母親の場合は、圧力意識が消極的もしくは中位のときに、上記の素直型の子が多い。(図10, 11)
- (5) 圧力点と注意散漫—注意型とについては、父の圧力意識が消極的であるとき、注意型の子どもがもっとも多い。しかし、父の圧力意識が積極的(非圧力の意識小)のときでも、この点の性行は悪くない。他方、母の場合は、圧力意識と注意型との間に顕著な関係が見られないが、圧力意識が中位のときには、注意散漫型の子が幾分見出される。(図12, 13)

こうした結果に基づき、われわれは、調査用紙(第2号)を改訂して新調査用紙(第3号)を作製し、さらに第4, 第5号用紙へと発展して、昭和45年に、

標準化された親子関係検査「診断性 P. C. R. 検査^{*}」を完成させた。その15年間の研究過程で、多様な研究結果（第1～第18報告）が心理諸学会その他^{**}で発表された。

* 山下俊郎監修：三浦 武，森 重敏，八重島建二，島田俊秀共著：診断性PCR検査（A型，B型，C型），東京心理株式会社発行，昭和45年。

** その他，三浦による関連の諸論文，人文学報（都立大人文学部）中の論文や，森による著書『幼児と家庭環境』（福村出版）が公にされている。

図5 母の保護点と「意思薄弱—意思」型

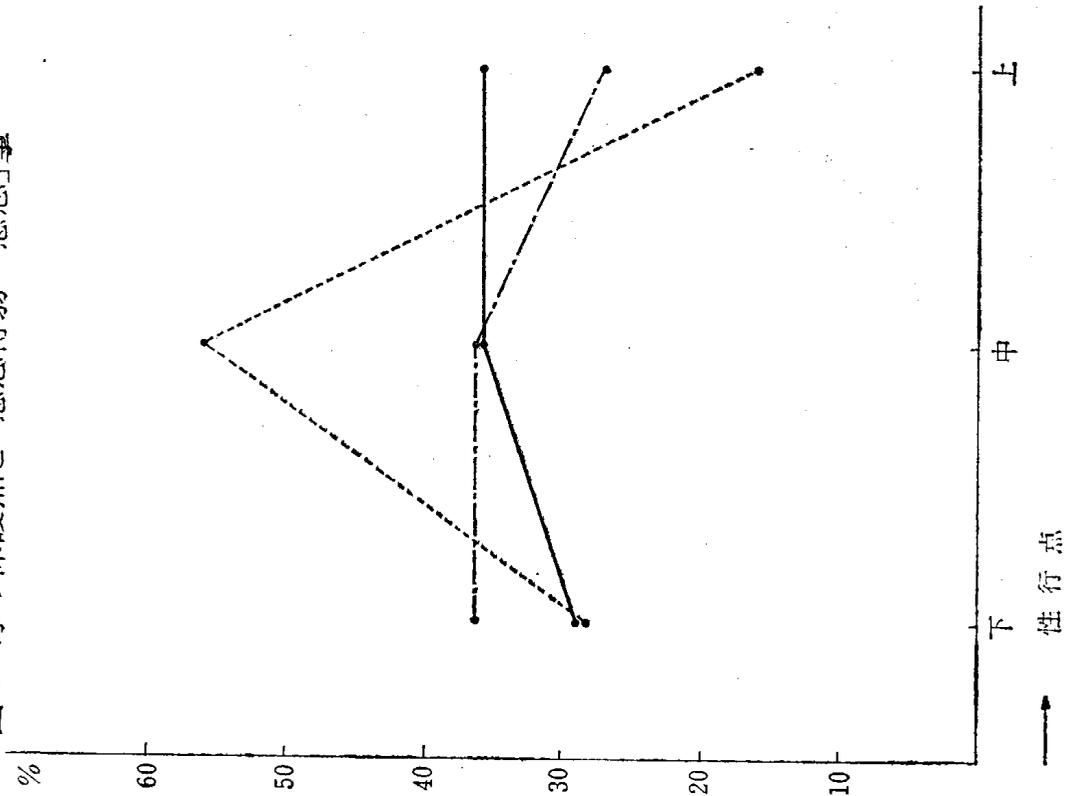


図4 父の保護点と「意思薄弱—意思」型

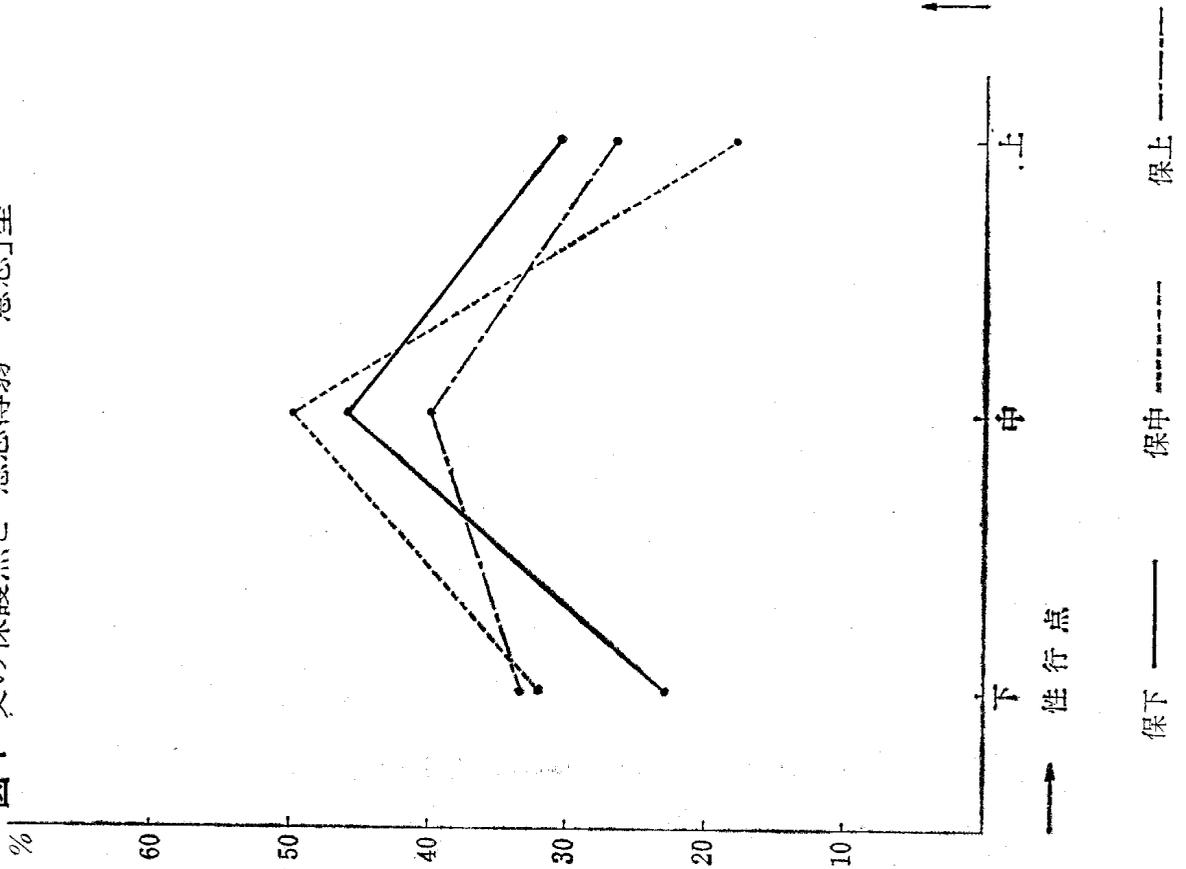


図7 母の保護点と「ひねくれ—素直」型

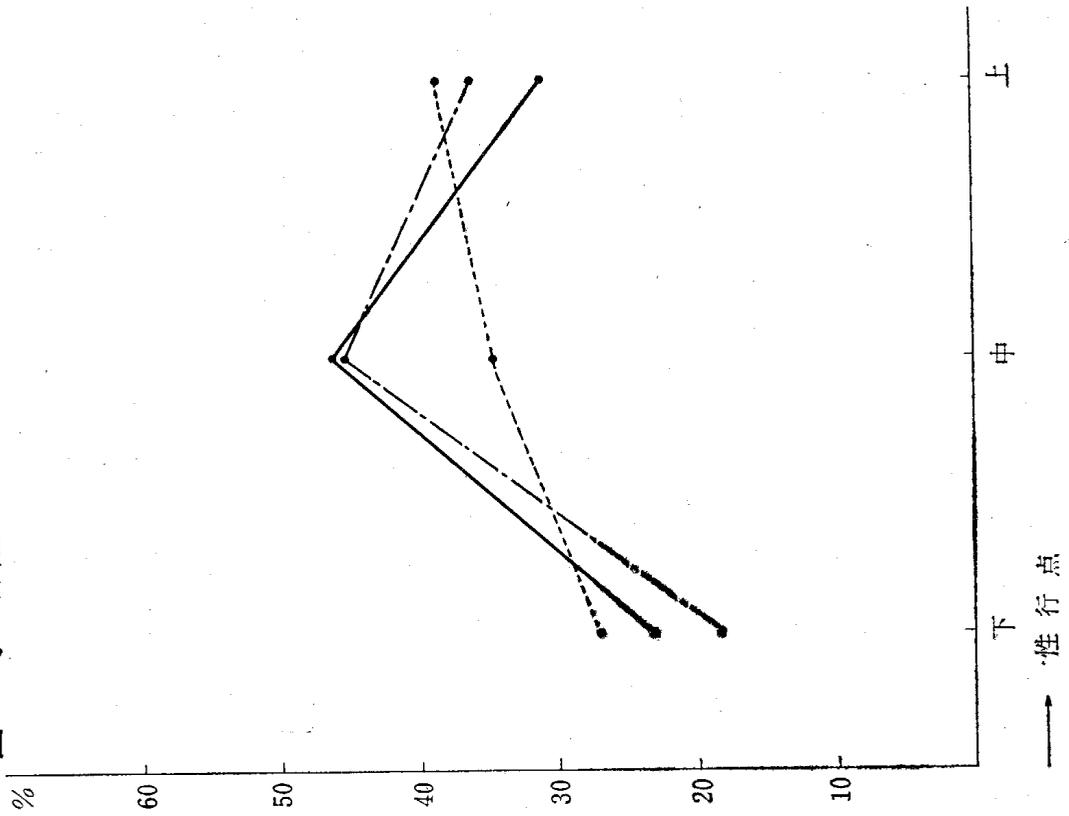


図6 父の保護点と「ひねくれ—素直」型

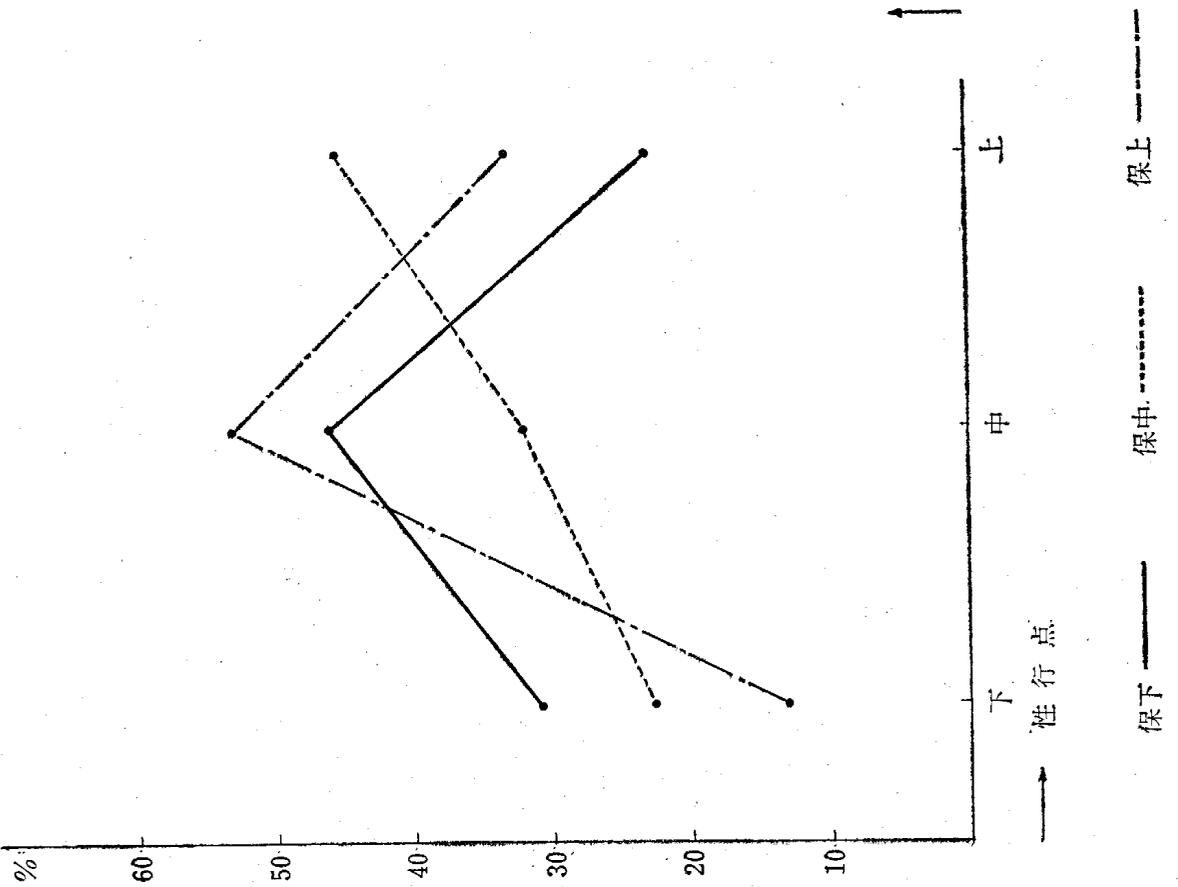


図9 母の圧力点と「意思薄弱—意思」型

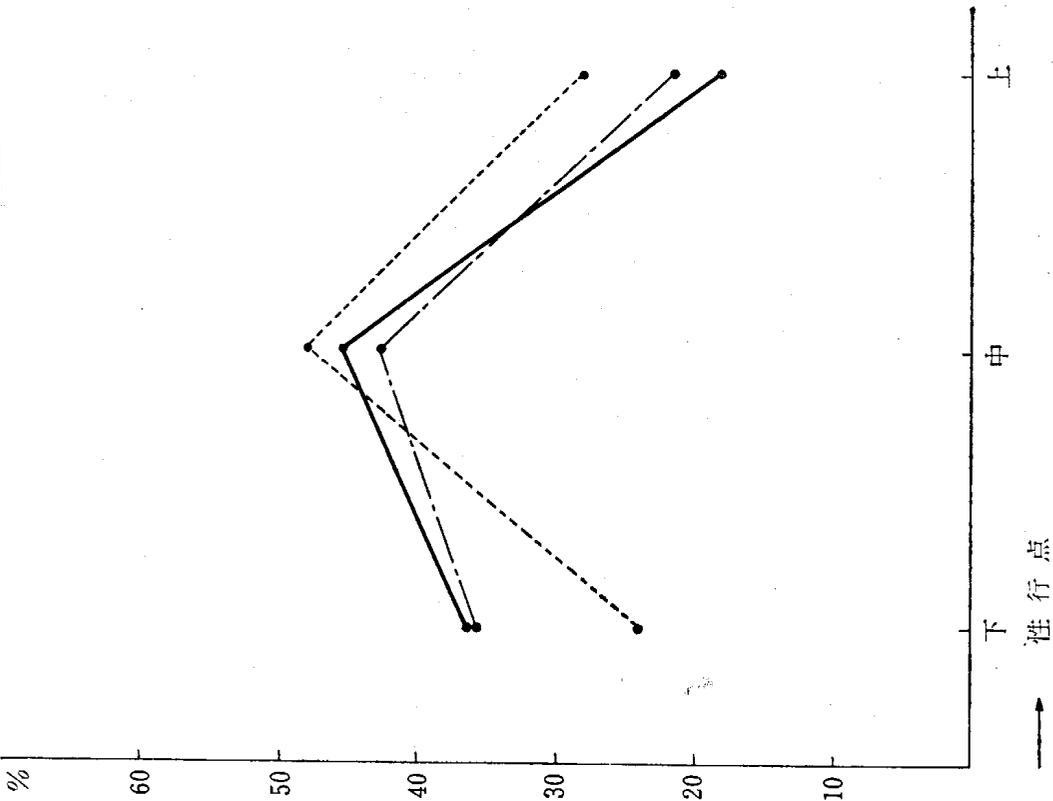


図8 父の圧力点と「意思薄弱—意思」型

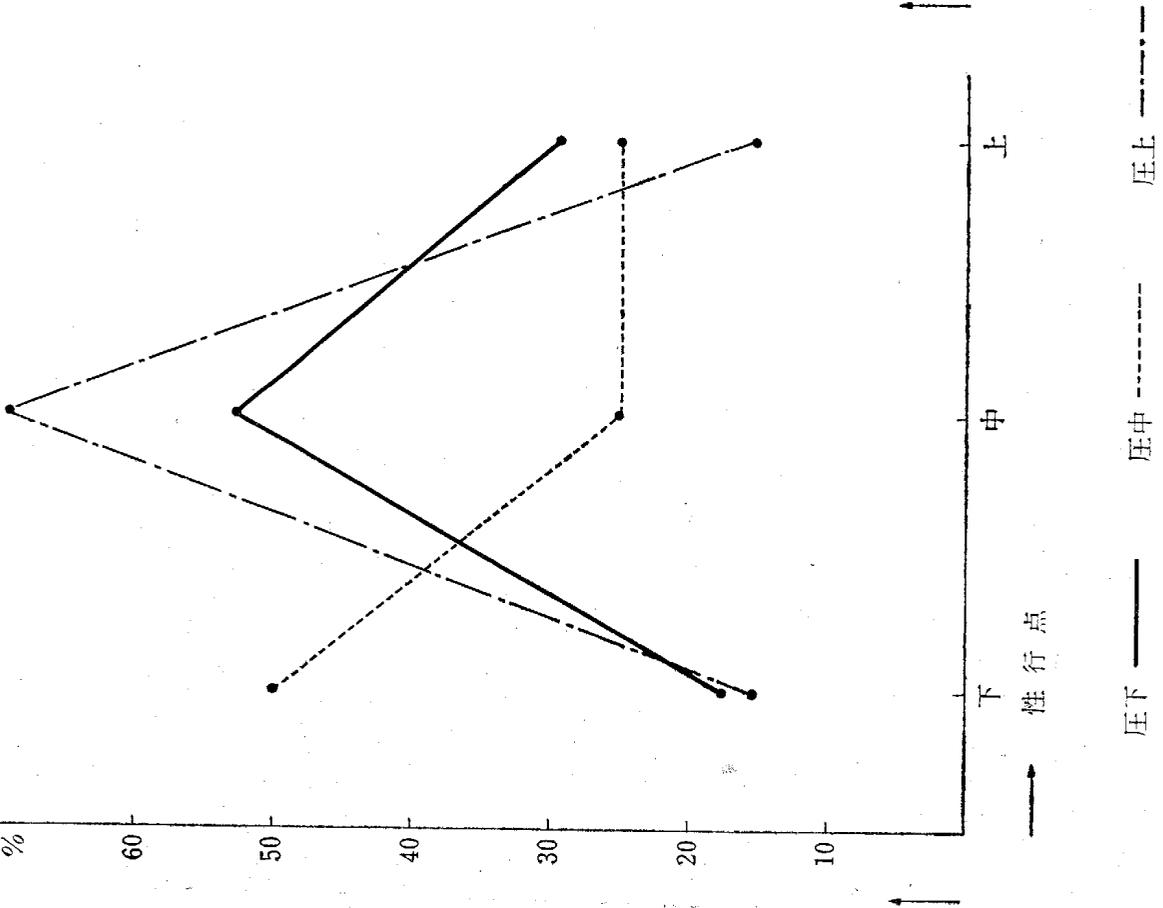


図11 母の圧力点と「ひねくれ-素直」型

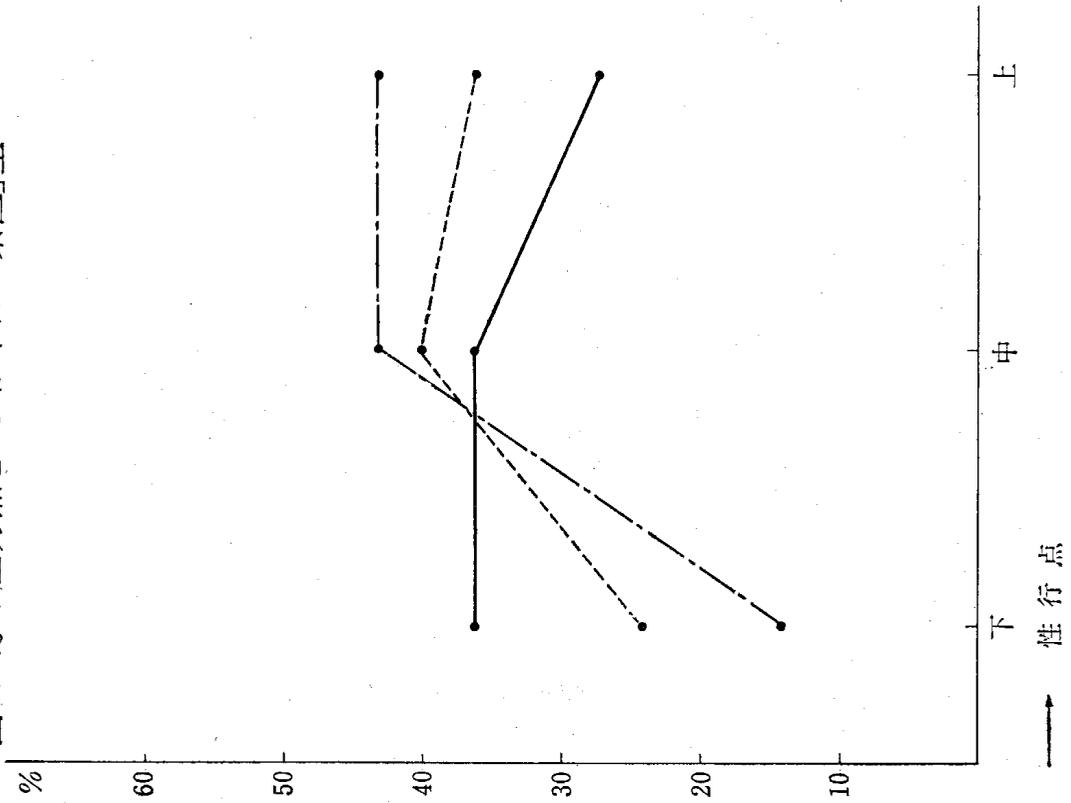


図10 父の圧力点と「ひねくれ-素直」型

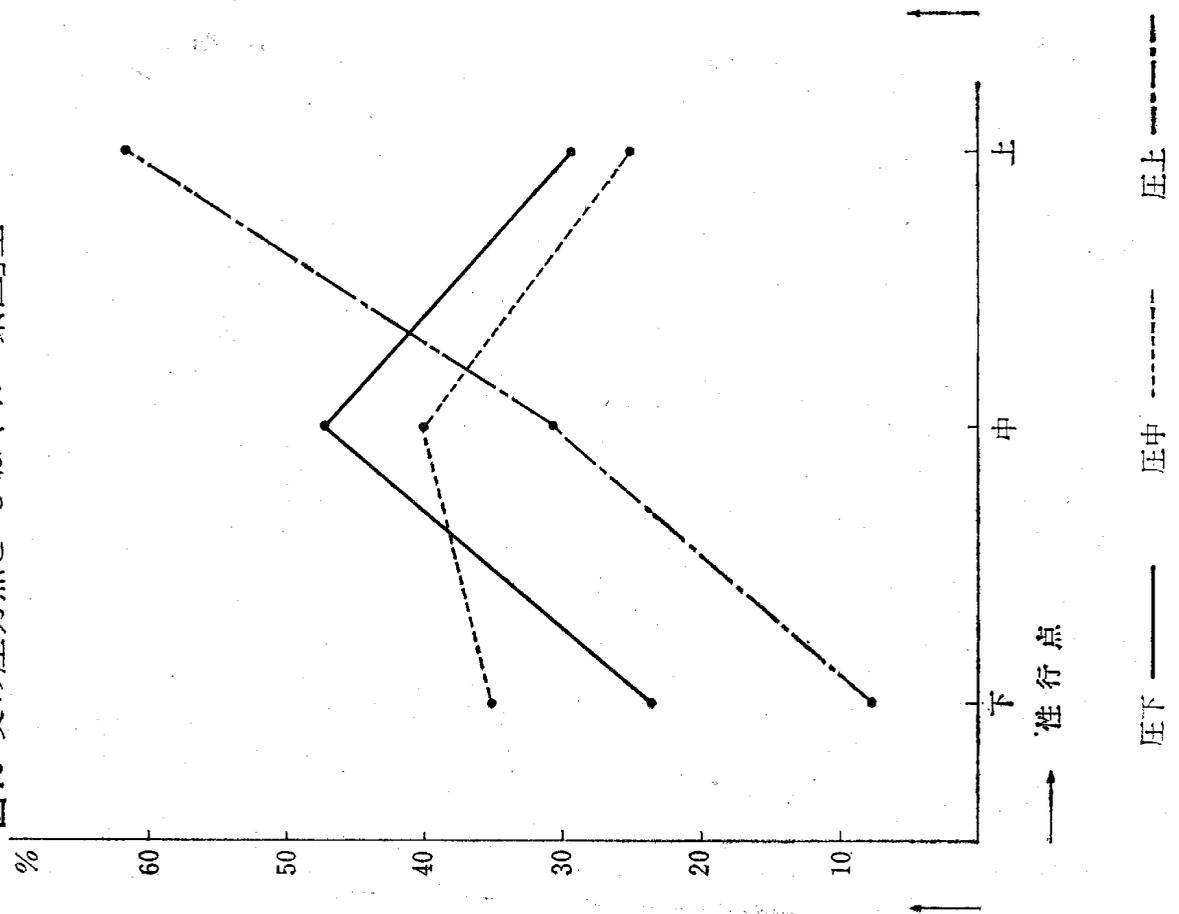


図13 母の圧力点と「注意散漫-注意」型

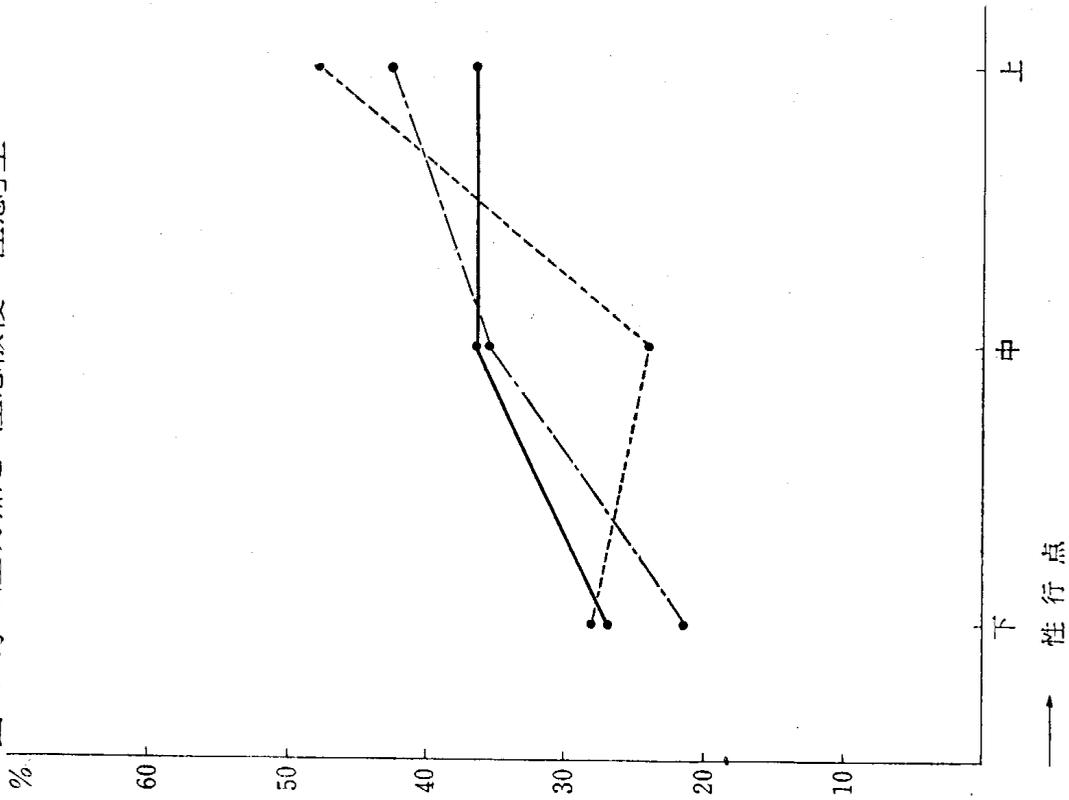
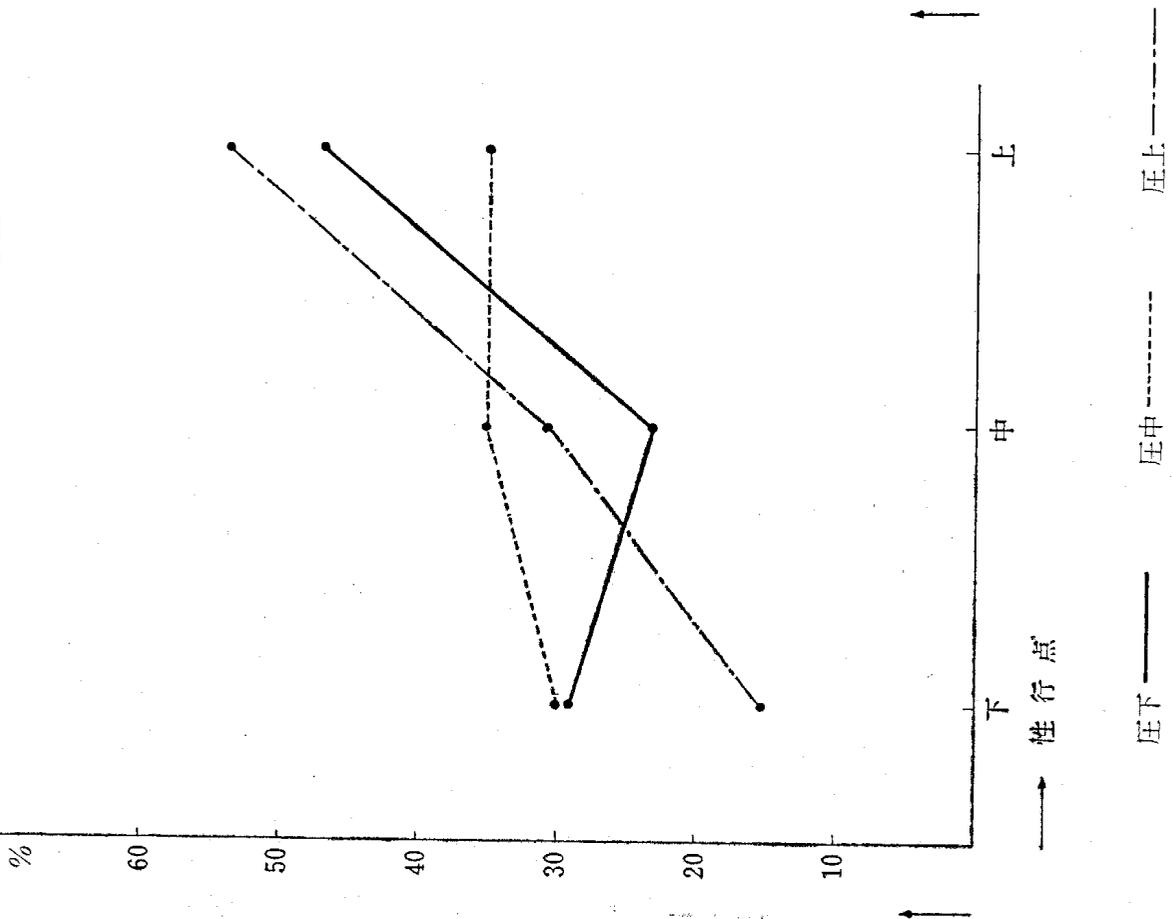


図12 父の圧力点と「注意散漫-注意」型



参 考 文 献

- 1) 山下, 三浦, 森, 三輪, 滝沢, 青木 1958 家族関係に関する基礎的研究—(1)父母のしつけ態度と子どもの性行等との関係, (2)父—母—子の接触と子供の性行等との関係 (3)父—母—子関係と Rorschach 反応—, 日本心理学会第22回大会発表論文集, 224—227
- 2) 森, 三浦, 滝沢, 山下 1959 生育環境としての家族関係の分析—(2)父—母—子の接触の研究, (3)Rorschach 評価点と父—母—子接触点について—, 日本心理学会第23回大会発表論文集, VII—201
- 3) 森, 八重島, 三輪, 島田, 三浦, 山下 1961 父—母—子関係の分析(5)—親の態度と子の性行との関係—, 日本心理学会第25回大会発表論文集 220
- 4) 森 重敏 1968 子どもと家庭環境, 福村出版

付録1

幼児性行評定尺度 (森 重敏修正案)

No.

児童氏名: _____ 男 女 昭和 _____ 年 月 _____ 日生 (満 才 月)

現住所: _____ 親の職業: _____

所属: _____ 幼稚園 _____ 年保育 _____ 組

評定者: _____ 続柄: _____

評定日: _____ 年 月 日 備考: _____

左 項 目	(イ) 殆んど左 目の通り 項目	(ロ) やや左 傾く 項目	(ハ) どちら でもない 項目	(ニ) やや右 傾く 項目	(ホ) 殆んど右 目の通り 項目	右 項 目
1. 気むずかしい						気軽である
2. 興奮し易い						平静である
3. 何ごとにも興味薄い						物事を知りたがる
4. 気が散り易い						よく注意する
5. 倦きっぽい						根気がよい
6. 性急である						落ちつきがある
7. 元気がない						元気である
8. 独創性がない						工夫をこらす
9. 意思を発表しない						卒直である
10. いいなり次第になる						自分の考えで行動する
11. 人の厄介になりたがる (依頼心が強い)*						自分のことは自分です
12. 剛情をはる						すなおである
13. ひとりぼっちを好む						協力する
14. わがままとを振舞う						秩序を守る
15. ふざけたがる						悪ふざけをしない
16. ねたみ深い						そねまない
17. よくすねる						我慢する
18. 人をいじめる (人とよくけんかする)*						睦み合う
19. 冷淡である						ひとの面倒を見る
20. ものを粗末にする						ものを大切にする

(記入法) 1. 左右の性行項目 (各20項目) について、子どもの性行がイ、ロ、ハ、ニ、ホ、の何れに該当するかを評定し、該当箇所 (□内) に○印をつける。
 2. 次に、○印をつけた項目中、最も特徴的なもの (長所と短所) と思われるものには、もう一つ○印をつける。すなわち◎印にする。
 3. 20項目全部について、必ずイ、ロ、ハ、ニ、ホ、のうちの一つだけえらぶこと。
 4. 評定は、子どもの日常のありのままを示すこと。
 注: * 児童を対象とする場合は、第11項目および第18項目のみ、() 内の項目を用いる。その他は同じ。

付録 2

〔調査用紙 1号〕

調査 A

児童氏名 _____

この小学校（幼稚園）に来ているあなたのお子さんと、あなたとの接触について、下に14の質問があります。それぞれの問について、非常によくやるか、普通であるか、余りしないかのどれかに、○印をして下さい。

1. よく遊んであげますか。	非常によくやる	普通	余りしない
2. よく話をしてあげますか。	非常によくやる	普通	余りしない
3. よく遊びにつれて行ってあげますか。	非常によくやる	普通	余りしない
4. ほしいものはよく買ってあげますか。	非常によくやる	普通	余りしない
5. 食事のときには、お子さんとにぎやかに話をして楽しくしますか。	非常に楽しくする	普通	余り楽しくしない
6. お子さんはよくお手伝いしますか。	非常によくする	普通	余りしない
7. お子さんは自分のことは自分でしますか。	非常によくする	普通	余りしない
8. お子さんは言うことをよくききますか。	非常によく聞く	普通	余りよくきかない
9. やっていけないと言うことを、またすぐやったとき、きびしく叱りますか。	非常にきびしく叱る	普通	余りきびしくは叱らない
10. 学芸会や運動会でよくできなかったとき、きびしく叱りますか。	非常にきびしく叱る	普通	余りきびしく叱らない
11. 困ったとき、すぐ助けてあげますか。	すぐ助けてやる	普通	すぐは助けてあげない
12. よそのうちを訪問して、お行儀よくできたとき、ほめてあげますか。	非常にほめてあげる	普通	あまりほめもしない
13. たのんだことを、その通りにできたときは、よくほめてあげますか。	非常にほめてあげる	普通	あまりほめもしない
14. 兄弟の中で、このお子さんを特にかわいがっていますか。	特にかわいがっている	普通	あまりかわいがっていない

調査 B

園児(学童)の名前	
生 年 月 日	昭和 年 月 日
保護者の名前	
調 査 日	昭和 年 月 日

- ① 1 { A お父さんともっと一緒に遊んでもらいたいですか はい いいえ ?
 B お母さんともっと一緒に遊んでもらいたいですか はい いいえ ?

- | | | | | | |
|---|-------------------------|---|--|-----|-----|
| 小 | 1 | A お父さんともっと一緒に遊んでもらいたいと思いま
すか | はい | いいえ | ? |
| | | B お母さんともっと一緒に遊んでもらいたいと思いま
すか | はい | いいえ | ? |
| | 2 | A お父さんにもっと一緒に話をしてもらいたいですか | はい | いいえ | ? |
| | | B お母さんにもっと一緒に話をしてもらいたいですか | はい | いいえ | ? |
| | 3 | A お父さんにもっと遊びにつれていってもらいたいで
すか | はい | いいえ | ? |
| | | B お母さんにもっと遊びにつれていってもらいたいで
すか | はい | いいえ | ? |
| 4 | A お父さんは欲しいものはよく買ってくれますか | はい | いいえ | ? | |
| | B お母さんは欲しいものはよく買ってくれますか | はい | いいえ | ? | |
| 5 | ごはんの時は賑やかにお話などをして楽しいですか | はい | いいえ | ? | |
| 6 | お母さんやお父さんのお手伝をしたいと思えますか | はい | いいえ | ? | |
| 幼 | 7 | おかたづけなどを一人できちんとしたいと思いますか | はい | いいえ | ? |
| 小 | 7 | 自分のことは自分でできちんとしたいと思いますか | はい | いいえ | ? |
| | | 8 | お父さんやお母さんの言うことを素直に聞きますか
(いやと言うことが多いですか) | はい | いいえ |
| 9 | (イ) | A やっていけないと言うことをまたすぐやった時
お父さんは厳しく叱りますか | はい | いいえ | ? |
| | | B やっていけないと言うことをまたすぐやった時
お母さんは厳しく叱りますか | はい | いいえ | ? |
| | (ロ) | A お父さんはひどく叱ったり、あまり叱らなかつ
たりいろいろですか | はい | いいえ | ? |
| | | B お母さんはひどく叱ったり、あまり叱らなかつ
たりいろいろですか | はい | いいえ | ? |
| 幼 | 10 | A 絵や歌がよくできなかつた時、お父さんはきびしく
叱りますか | はい | いいえ | ? |
| | | B 絵や歌がよくできなかつた時、お母さんはきびしく
叱りますか | はい | いいえ | ? |
| 小 | 10 | A 学校のテストの成績が悪いとお父さんはあまり厳し
く叱るからいやだと思いますか | はい | いいえ | ? |
| | | B 学校のテストの成績が悪いとお母さんはあまり厳し
く叱るからいやだと思いますか | はい | いいえ | ? |
| 幼 | 11 | 着物などよく着れない時、すぐ手伝ってもらいたい
ですか | はい | いいえ | ? |
| 小 | 11 | A 勉強でわからない時、もっとお父さんに教えてもら
いたいと思えますか | はい | いいえ | ? |
| | | B 勉強でわからない時、もっとお母さんに教えてもら
いたいと思えますか | はい | いいえ | ? |

- | | | | | | |
|------|---|---|----|-----|---|
| 12 | { | A お行儀よく出来た時、お父さんはもっとほめてくれればよいと思いますか | はい | いいえ | ? |
| | | B お行儀よく出来た時、お母さんはもっとほめてくれればよいと思いますか | はい | いいえ | ? |
| 13 | { | A 頼まれたご用がちゃんと出来た時、お父さんはもっとほめてくれればよいと思いますか | はい | いいえ | ? |
| | | B 頼まれたご用がちゃんと出来た時、お母さんはもっとほめてくれればよいと思いますか | はい | いいえ | ? |
| 14 | { | A お父さんにはあなたが一番可愛がられていると思いますか | はい | いいえ | ? |
| | | B お母さんにはあなたが一番可愛がられていると思いますか | はい | いいえ | ? |
| 15 | { | A お父さんが体が弱くて寝てばかりいるからいやだと思いますか | はい | いいえ | ? |
| | | B お母さんが体が弱くて寝てばかりいるからいやだと思いますか | はい | いいえ | ? |
| 16 | { | A お父さんはもっと早く帰ってきてほしいと思いますか | はい | いいえ | ? |
| | | B お母さんはもっと早く帰ってきてほしいと思いますか | はい | いいえ | ? |
| 小 17 | | 同胞の中で貴方ばかり厳しいからいやだと思いますか | はい | いいえ | ? |
| 小 18 | | 余り勉強ばかりさせるからいやだと思いますか | はい | いいえ | ? |
| 小 19 | | あなたはお稽古ごとをしていますか、無理にお稽古ごとをさせるからいやだと思いますか | はい | いいえ | ? |
| 小 20 | | すぐ用事ばかり言いつけるからいやだと思いますか | はい | いいえ | ? |
| 小 21 | | お父さんにはお酒をやめてもらいたいと思いますか | はい | いいえ | ? |
| 小 22 | | お父さんはお母さんをいじめない方がよいと思いますか | はい | いいえ | ? |
| 小 23 | | お父さんはもっと早く起きた方がよいと思いますか | はい | いいえ | ? |
| 24 | | 家の中で一番好きな人は誰ですか | | | |
| 25 | | 家の中で一番きらいな人は誰ですか | | | |
| 26 | { | (イ) A お父さんの好きな所(良いところ)はどこですか | | | |
| | | B お母さんの好きな所(良いところ)はどこですか | | | |
| | { | (ロ) A お父さんのきらいで悪い所はどこですか | | | |
| | | B お母さんのきらいで悪い所はどこですか | | | |
| 27 | | 何かを買ってもらいたい時には誰に頼みますか | | | |
| 28 | | あなたは大きくなったら何になりたいですか | | | |

調査C

園児(学童)の名まえ	
生 年 月 日	
保護者の名まえ	
調 査 日	

下に書いてある(1)から(10)までの10項目のことについて、それぞれイロのうちのどちらか、あなたが賛成なさる方、あるいは実行なさっている方を一つだけ選んで、イかロの字を○でかこんで下さい。

- (1) {
 イ. 叱るときもほめるときも、いつもその効果を考えながら叱ったりほめたりします。
 ロ. 子供を叱るときは心から怒って叱り、ほめるときは心から喜んでほめます。
- (2) {
 イ. 子どもの教育で一番大事なのは、いつも深い愛情をもって子どもに接することだと思います。
 ロ. 子どもの教育で一番大事なのは、いつも親が理くつに合った、そして子どもの納得が得られるような態度で、子どもに接することだと思います。
- (3) {
 イ. 経済の許す限り、子どものほしがるものはできるだけ買ってやりたいと思います。
 ロ. ただ子どものほしがるものを買ってやるのではなく、たとえ子どもがほしがらなくても子どものためになるものは買ってやりたいと思います。
- (4) {
 イ. 合理的、現実的できちょうめんな子どもに育てるのがよいと思いますか。
 ロ. 笑いやユーモアがあり、子どもらしい空想のある子どもに育てる方がよいと思います。
- (5) {
 イ. 子どもが特に熱心に遊んだり勉強したりしている時は、事情によっては日課を多少変えてもよいと思います。
 ロ. どんな事情があっても、日課はきちんと守らせる方がよいと思います。
- (6) {
 イ. 「しましょね」ということの方が「してはいけません」ということより多いようです。
 ロ. 「してはいけません」ということの方が「しましょね」ということより多いようです。
- (7) {
 イ. 食事の時はきちんと座って食べることの方が大事だと思います。
 ロ. 食事の前には自発的に手を洗うようにすることの方が大事だと思います。
- (8) {
 イ. 家の中で遊ぶときは、大人のじゃまにならないように遊ぶことが大事だと思います。
 ロ. 家の中で遊ぶときは、後片づけを自分ですることが大事だと思います。
- (9) {
 イ. 家の手伝いは、仕事の責任をもって行うことの楽しさを教えるためにさせています。
 ロ. 家の手伝いは、親の言いつけには従順に従う習慣を作るためにさせています。
- (10) {
 イ. 叱ることより、ほめることの方が多いいようです。
 ロ. ほめることより、叱ることの方が多いいようです。

付録 3

〔調査用紙第2号〕

昭和34年作製 32項目

幼稚園 小学校	昭和 年 月 日調査
名 前	

次にいろいろの質問が書いてあります。これはあなたのお子さんにおききした質問です。お子さんは、それに対してどのように答えたと思いますか。その答え方を想像してください。もしお子さんが「はい」と答えたと思ったら、あなたも「はい」に○をつけてください。もしお子さんが「いいえ」と答えたと思ったら、あなたも「いいえ」に○をつけてください。またお子さんが「どちらでもない」と答えたと思ったら、あなたも「どちらでもない」に○をつけてください。もしお子さんが何と答えたかどうしてもわからない場合は、右端のあいているわくの中に「わからない」と書き入れてください。(17番と23番の問題は、幼稚園児のおかあさんにご記入くださらなくて結構です。)

1. おかあさんは、あなたといっしょに、よく遊んでくれますか。

はい いいえ どちらでもない
2. おかあさんは、あなたによくいろいろなお話をしてくれたり、本を読んでくれたりしますか。

はい いいえ どちらでもない
3. おかあさんは、あなたにたいへんやさしくしてくれますか。

はい いいえ どちらでもない
4. あなたが絵や作品(製作品)を見せたとき、おかあさんはよく見てくれますか。

はい いいえ どちらでもない
5. おかあさんは、あなたによく「ばか」とか「あほう」とかいうような悪口をいいますか。

はい いいえ どちらでもない
6. あなたがよい子になるのを、おかあさんはたのしみにしていますか。

はい いいえ どちらでもない
7. あなたが学校(幼稚園)であったことを話したとき、おかあさんはよくきいてくれ

- ますか。 はい いいえ どちらでもない
- 8 「いそがしい」とか「うるさい」とかいて、おかあさんが相手になってくれない
ことがありますか。 はい いいえ どちらでもない
- 9 ごはんのときなど、おかあさんはあなたに楽しく話しかけてくれますか。
はい いいえ どちらでもない
- 10 あなたがよいことをしたら、おかあさんはほめてくれますか。
はい いいえ どちらでもない
- 11 本やラジオでわからないことがでてきたとき、おかあさんはよく教えてくれますか。
はい いいえ どちらでもない
- 12 絵や作品（製作品）がうまくできないで困っているとき、おかあさんはよくはげ
まして（手伝って）くれますか。 はい いいえ どちらでもない
- 13 おかあさんは、遊びによく連れていってくれますか。
はい いいえ どちらでもない
- 14 歯をみがかなかったり、ごはんの前に手を洗わなかったりしたとき、おかあさんは
注意しますか。（していらっしゃいといいますか。） はい いいえ どちらでもない
- 15 あなたがたのんだことを、おかあさんはいっしょうけんめいにやってくれますか。
はい いいえ どちらでもない
- 16 絵をかいたり工作（製作）をしたりするときに、たりないものがあつたら、おかあ
さんはすぐ用意（おしたく）してしてくれますか。 はい いいえ どちらでもない
- 17 おかあさんは、あなたによく勉強を教えてください。（小学校のみ）
はい いいえ どちらでもない
- 18 あなたがいっしょうけんめいに何かしているとき、おかあさんが用事をいいつける
ことがありますか。 はい いいえ どちらでもない
- 19 おうちの手伝いのやり方をきめたり、夜寝る時間をきめたり、あなたのものを買っ
たりするときに、おかあさんはあなたとよく話し合いますか。
はい いいえ どちらでもない
20. あなたがやりたがっていることを、まだ子どもだからといっておかあさんが止める

- ことがよくありますか。 はい いいえ どちらでもない
- 21 あなたが自分ひとりですらばにあと片づけをしたときや、ひとりで考えてものを作りあげたときに、おかあさんはよくほめてくれますか。 はい いいえ どちらでもない
- 22 あなたがきれいな洋服や着物を、おかあさんはむりに着せることがありますか。 はい いいえ どちらでもない
- 23 おかあさんは、あなたのいいわけを少しもきかないでしかることがよくありますか (小学校のみ) はい いいえ どちらでもない
- 24 おかあさんは、あなたに「ぐずぐずしてはいけません」とか「のろま」とか、うるさくいいいますか。 はい いいえ どちらでもない
- 25 あなたが、手や足をよごしたり着物をよごしたりすると、おかあさんはすぐやかましくしかりますか。 はい いいえ どちらでもない
- 26 あなたが学校(幼稚園)でしたことや成績(絵やおゆうぎ)のことを、おかあさんはうるさくいいいますか。 はい いいえ どちらでもない
- 27 おかあさんは、あまりたくさん用事をいいつけますか。 はい いいえ どちらでもない
- 28 あなたにできそうもない(できない)ことを、おかあさんはどうしてもやらせようとしますか。 はい いいえ どちらでもない
- 29 おかあさんは、あなたのきれいな食べ物をからだによいからといって、むりに食べさせようとしますか。 はい いいえ どちらでもない
- 30 かぜをひくからといって、おかあさんはいつもたくさん着物を着せますか。 はい いいえ どちらでもない
- 31 まちがってしょうじをやぶったり、ガラスをわったりしたとき、おかあさんはひどくしからないで、やさしくいきかせてくれますか。 はい いいえ どちらでもない
- 32 おとうさんやおかあさんのものをいじったり、お庭の花や木をいためたりしたとき、おかあさんはたいへんうるさくいいいますか。 はい いいえ どちらでもない